

父よ、南冥の海に眠れ

篠原昌史 壬生町

私の父は、海軍の軍用船となった大阪商船バタビア丸（注）の機関長として、昭和19年6月12日、トラック島を発った。その後サイパン島に寄ってから再び出航したが、その直後、サイパン上陸を狙う米国機動部隊に遭遇して、44歳の働き盛りで無念の戦死を遂げた。私は旧制中学3年の14歳だった。

●父の最期を知る

船の最期の状況は平成7年に日本殉職船員顕彰会資料で知ったが、父の最期の模様は終戦の翌年、昭和21年1月に奇遇にも、詳しく知ることとなった。

米国機動部隊の攻撃を受けた昭和19年6月12日の朝方、同じ船団の一人の青年ボイラーマンが父の船に助けられた。しかしその夕刻、父の船も沈没したことで、その青年は何日間も太平洋を漂流し、偶然通りかかった米国病院船に救われ、ハワイで捕虜生活を経験した。その後、すでに死んだ者として葬儀が終わっていた郷里、栃木県烏山に帰還したのだった。当時そのことが新聞で大きく報じられたが、青年の遭難の月日、場所が父の戦死の情報とピッタリ合っていたので、母、弟

と3人で彼の家を訪問した。そこで次のような話を聞くことができた。

朝の攻撃を何とか切り抜けたバタビア丸は、精いっぱい速度でサイパンから西北約300歳の洋上まで逃れたが、相手は航空機なので勝負にならない。夕方、再度20機の雷撃を受け、海底に沈んだ。父は最後まで甲板で指揮をとっていたが、ついに機銃で撃たれ、足を引きずりながら船橋を登っていったとのことだった。

船長とともに船と運命を共にしたのは、海に生きる船乗りのトップとして覚悟の最期だったと思う。朝に攻撃を受けてから夕方再度攻撃されるまでの長時間、負傷しながらも指揮官としての任務を全うした。最後に船と共に海に沈む時、父は最愛の私達家族のことをどう思んだことだろう。

この船団32隻は数隻の駆逐艦を含む護衛艦もろとも全滅したと記録に残っている。サイパン最後の引き揚げ船として、大勢の乗組員や婦女子を含む邦人も船と共に海に沈んだ。戦争の惨さ、残忍さを物語る。

●家族の思い出

父は壬生町羽生田の農家の三男として生まれ、親戚の寺を継ぐのが嫌で家を飛び出し、官費の東京高等商船学校に入った。母も壬生

町稲葉の農家の娘だったが、当時としては数少ない栃木高女（現在の栃木女子高）卒だったので、似合いということになったのか、昭和初期に父28歳で結婚し、兵庫県神戸市灘区に居を構えた。

昭和12年に日中戦争（当時はまだ支那事変と称していた）が始まった頃は、父の仕事は普通の外国航路が多かったが、ときどき軍用船となって中国に渡っていた。

軍用船となると航行は軍秘密となるので、いつ、どこにいるのか家族には全くわからないし、手紙もこないのだった。当時は今の携帯などはおろか、一般の家庭には電話さえない時代だった。夜中に突然帰宅し、朝、暗いうちに家を出ることがあったりしても、子供たちは寝床で眠気眼でかすかに知るだけだった。

まれに2、3泊したときなど、「揚子江を航行中に両岸の中国軍から砲撃を受け、ヒュウヒュウと飛び交う弾の音を聞いた」とビールを飲みながら話してくれたこともあったが、その頃はまだまだ勝ち戦の段階で、戦争の悲惨さには程遠い感じで聞いた覚えがある。

昭和13年の秋、母は結核に侵され床に伏していた。しかし子供として母の死など考え

もしなかったが、昭和14年1月、母は33歳で逝ってしまった。私は9歳だった。2日後の1月15日、大相撲で、あの有名な双葉山が安芸海に69連勝を阻まれ、ラジオはがなりたてていたが、私たち兄弟はただ泣くばかりだった。

当時、父は軍用船で不在、郷里から駆けつけて母の看病をしていた祖母のはからいで、栃木から親戚が数人神戸に來られて葬儀が行われ、9歳の私が喪主として最初に焼香したことを覚えている。

確か、数日後のある夕方、思いがけなく父が帰宅した。妻死亡の緊急連絡が船に届いたのか、何も知らずに帰宅したのかはわからなかったが、仏壇に置かれていた骨壺の前で号泣していた父の姿を見て、私も弟も一緒に泣いた。父は休暇をもらったのだろう、私たちが兄弟を姫路城に連れていってくれたり、元町でフルーツポンチを食べさせてくれたのを覚えている。

その後、父は船乗りとしての職業を果たすため、私達を故郷栃木の親戚に預けたが、再び神戸に生活の拠点を置くために、息子の教育を託せる後妻を探すことになったと思う。

父と育ての母との結婚式は昭和15年1月に目黒の雅叙園で行われた。父は当時台湾航

路だったが、停泊期間（3日間）を使っての結婚式と私たちの引越しただったので、家族一行は式翌日の夜行列車で神戸に発った。それが父の再婚の新婚旅行でもあったのだ。須磨の新居に到着した早朝、父は出帆日なので家に上がらないまま、すぐ神戸港に向かった。

●優しかった父

私は父に怒鳴られた記憶がないし、まして殴られたこともない。父母の口論を耳にしたこともない。本当に私たち子どもにも母にも優しい父だったと思う。

しかし教育では厳しい一面もあった。私たちが小学校低学年時代、たびたび六甲山に画板をぶら下げて行き、握り飯を頬張りながらスケッチをしたことがあった。しかし、決して駅からロープウェイの乗り場までバスには乗せてくれず、いつも歩きだった。幼い目には次々に自分たちを追い越していくバスが恨めしかった。

そうそう、何度か同じ原因で叱られたことがあった。それは私たち兄弟がよく将棋の「待った」で、口論から取っ組み合いになったとき、父がスツと現れ、いきなり駒を取り上げて風呂のかまどに放り込んでしまったのだ。これは何度かあった（当時は石炭や薪

で風呂を沸かしていた）。なお、将棋盤は大きいので火あぶりの刑を免れていた。父が航海中で家に居ないときは、この喧嘩がどういう形で収まっていたのか記憶にはない。父が在宅だと兄弟に自然と甘えを起こさせていたのかもしれない。

●父と重なる船の勇姿

船員家族ならではの思い出を一つ。父は再婚時は高砂丸（敗戦後引き揚げ船で有名となった）で前述通り台湾航路についていた。家族にとつてはせつない事だったが、あいにく日曜日に出帆となることがある。出帆時刻は正午だった。母、弟と三人で浜に出て、大きな船体が神戸港方面から静かに顔を出し、大阪湾をよぎり明石海峡に消えるまでの数十分、手を振って見送った。一万トンの船が沖合いを進む姿は雄大だったが、父の船と思うと、なお子供心は踊ったものだ。

さて、船が真正面に差し掛かった頃、いつの日からかボー、ボーと2回、太い低い汽笛が響くようになった。父がボイラーマンに鳴らさせたそうだ。今にして思えば、すでに九州沖でも輸送船が米国潜水艦に撃沈される危険な戦局だったので、「行って来るぞ！元気で待ってろ」という強い意志表示だったかもしれない。

●太平洋戦争の勃発

昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発した。子供心にハワイ、マレー沖の戦果をはじめ、数か月は大本営発表に踊らされ、アジアの地図上に日の丸を描いてうきうきしていたように思う。当時の新聞やラジオも、専ら勝利の報道で煽り立てていたから、子供の気持ちとしては当然だったろう。そんなとき、台湾航路から帰った父はポツリと一言、「今始めたのでは船が足りない」と。「なぜ？」と小学生の心にグサリと刺さったことをよく覚えている。

ある夜、両親が浮かぬ顔をしていたので聞くと、アリゾナ丸に移って南米航路に決まったよし。帰国まで半年の長い航海になるとのことだった。そしていよいよ出帆の日。家族には寂しく響くドラの音とともに岸壁を離れる船腹、何百本の七色のテープ、腕に何本かの金筋の入った制服でデッキに立つ父の姿。そして船が見えなくなるまで岸壁の先に立ち尽くす母の後ろ姿。今、ペンを執りながらも当時の淋しさがこみ上げる。しかしそれはまだ平和な時代の外国航路に出る客船の華やかな出帆風景だった。

●軍用船となったばたび丸

昭和18年12月31日、父は次にばたび丸

でバンコックに出帆した。すでに戦争は敗戦の坂を転げ落ちつつある状態で、日本周辺の制海権もなくなり、台湾や大連に向う船が門司港を出て直ぐに、米国潜水艦の魚雷一発で沈没するという状態が頻発していた。すでにわが国の力は落ちていたのだった。父の友人たちも次々に米国潜水艦の攻撃で沈没し、父は何度か、戦死された友人達の葬儀委員長をしていた。「俺は大丈夫」と私たちには言っていたが、今思えば、船乗りのプロとして状況の厳しさは十分知っていただろう。

バンコック航路は2か月の予定だったが、あいにく大晦日に出帆となり、親子4人で1日早い正月を祝って父の航海の安全を祈願した。すでに南支那海の制海権もなかったので海洋を進めずに、中国本土沿岸伝いに帰国したため、3週間ほど遅れて神戸に着いた。父は「門司に入港したとき、ホツとした」と漏らしていたが、こういう言葉を聞いたのは初めてだった。

ばたび丸は帰国後10日くらいで軍用船になった。すると、船長は体調不調を理由に退船した。母は遭難の危険性を予感して、「理由を付けて退船を」と父に勧めたが、機関長だった父は責任感からか「幹部二人が降りたらまずい」と決心し留まった。これが結果と

して、生死を分けることになってしまったのだ。しかし、私はこの厳しい決心をした父を誇りに思っている。

出航までの数日、毎日船団編成の会議で父の帰宅は遅かった。少し疲れていたようだったし、珍しく私たちにも笑顔を見せなかったように思う。このときすでに父は、戦況の悪化から遭難の危険性と死を覚悟していたのではなかったらうか。

●今でも瞼に浮かぶ父の姿

昭和19年4月上旬、父は神戸からサイパンに出航した。南米やバンコックへ発つ客船と違い、軍用船の場合は、沖合いから静かに船出するのだから、岸壁でのドラもなければ華やかなテープの見送りもない。父は、迎えるのはしけの舳先に立って、見送りの家族3人に軽く手を挙げると、すぐ船室に降りた。何か寂しげだったし、私も何となく不安で悲しかった。そしてそれが父と私のこの世での別れとなってしまった。いまでも鮮やかに70年前のあのときの光景が瞼に浮かぶ。

父は「遅くとも6月には帰る」と言っていたが、その6月にサイパンに米軍が上陸した。嫌な予感がし、それは的中した。夏が過ぎ、父の友人や会社に問い合わせたが、秘密だったのだろう、「一切不明」の回答。し

かし10月のある日の午後、父の友人が訪れ、母と長く話し込んでいた。別室にいた私は何か胸騒ぎを覚えたものだ。果たしてその方が帰られた後、母は私たち兄弟を仏壇の前に呼び、線香を上げさせた。父、絶望の知らせだったのだ。37歳で未亡人となった母は厳しい顔つきだったし、私も子供心にも長男として母を支えなければと、健気な気持になったことを覚えている。

昭和20年4月、私は生前の父の教えもあって、憧れの海軍を志望して海軍経理学校（現在の防衛大学の類）に入った。同年6月のある日の夜、教官から呼び出され父の戦死を知らされた。戦死後1年経っていたが、前年10月に内報で知っていたので「やっぱり」という諦めの境地だった。その2か月後に敗戦となった。海軍の学校は解散となったので帰郷し、10月から古巣の旧制中学校4年生に戻った。

●白木の箱には一片の紙

気になったのは父の遺骨が届かないので葬式ができないことだった。もともとマリアナの海に沈んだのだから遺骨や遺品がないのは仕方がないが、敗戦で役所も混乱していたのだから。痺れを切らして県庁に問い合わせたところ、程なく県庁に出頭せよ、との連

絡があった。伯父と二人で出向き、白木の遺骨箱を白布で肩にかけて壬生駅に降りた。

驚いたし、感激もしたのは、駅頭に壬生小学校の吹奏楽団が待っていてくれ、静かな曲で迎えてくれたことだった。英霊の帰郷といっても敗戦後数か月も経っている。県から役場に、そして学校に依頼があったのだろう。行政の温かさを感じた。父も喜んでくれたと信じている。帰宅して箱を確かめたら「篠原昌道の霊」と印刷された一枚の和紙（3枚×10枚）だけが入っていた。母、弟と3人で父との15年の生活を思い出しながら夜を明かした。

考えてみれば、育ての母は37歳で戦争未亡人となった。父母の結婚生活はたったの4年半である。停泊期間だけを数えれば実質1年くらいだったろう。私が社会人になったある日、母は「お父さんとは式の前に契りを結んだのよ」と思い出すように話したことを覚えている。戦前なのに進んだ思想の夫婦だったように思う。その母も90歳の天寿を全うし、平成8年に永眠した。父母はいま天国で安らかに語り合っているだろう。

注：ばたびあ丸

太平洋戦争中の昭和19年6月12日、戦局が悪化し、



炎上している「ばたびあ丸」

大阪商船 4392 総トン
北緯 17 度 07 分、東経 143 度 34 分(サイパン北西 310km 付近)、
米軍機撮影
全日本海員組合「戦没した船と海員の資料館」HPより 引用

疎開児童を含む婦女子、3、400人がサイパンから内地に引き揚げることになり輸送船ばたびあ丸、門司丸など15隻へと分乗した。しかしアメリカ軍の艦載機が数百機の大編隊で爆撃と機銃掃射で襲いかかった。隊伍を組んで航行していた船団は修羅と化し、輸送船15隻、護衛艦11隻の大船団も多くの戦死者を出しながら、ほとんど海底に没した。